

F-19

“対話型” 自校教育の場としての大学博物館に関する実践的研究

—日本大学理工学部科学技術史料センター (CST MUSEUM) 館園実習における佐野利器顕彰を通して—

The Practical Study of the University Museum as the Place of Interactive Education for Understanding Our-own University  
- The Papers Analysis about Professor Toshikata Sano Written by the Curator Practice at the CST MUSEUM-

○堀川洋子<sup>1</sup>, 伊東孝<sup>2</sup>, 重枝豊<sup>3</sup>

\*Yoko Horikawa<sup>1</sup>, Takashi Itoh<sup>2</sup>, Yutaka Shigeeda<sup>3</sup>

Abstract: We made the interactive teaching program for understanding our-own university. We applied it to the curator practice at the College of Science and Technology Museum (CST MUSEUM), Nihon University in 2010. 7 trainees wrote the papers about Professor Toshikata Sano (1880-1956) who had contributed to establish the College of Science and Technology, Nihon University. In this paper, we clarified the following 3 outcomes:

- (a) The trainees reported about the following 3 items:
  - i) Professor Sano was a scientific engineer about architecture and city planning, and also a great engineering educator.
  - ii) At the present time his teachings have been living in the College of Science and Technology, Nihon University.
  - iii) The CST MUSEUM should promote more exhibitions, researches and collecting the materials about him.
- (b) The views and proposals of the trainees are useful for coming exhibitions at the CST MUSEUM.
- (c) This program will be applied as the method of the student participation in the exhibitions.

1. はじめに

本研究では、あらたに“対話型”自校教育プログラムを考案し、それを平成 22 年度日本大学理工学部科学技術史料センター (CST MUSEUM) 館園実習に適用した。その結果、7 名の実習生 (土木 3 年 1 名, 建築 4 年 5 名, 建築卒 1 名) が、「理工学部創設者佐野利器先生 (1880-1956) <sup>[1][2][3]</sup>の大学博物館における顕彰意義」に関するレポート (A4, 4~5 枚程度) を作成した (Tab.1)。

従来の自校教育には、①大人数を対象にする講義形式、②大学博物館での展示、など“片方向型”がよくみられる。本研究では、大学博物館における館園実習を活用した“対話型”教育プログラムを通じて、学生からの提案や作品を採集し、博物館における“学生参加型展示”などに資することを意図している。

本プログラムにおける博物館と実習生の関係は、次のように位置付けた。

- 1) 実習生は、史資料にふれながら、大学史や人物、博物館学などについて学び、学習後に、博物館に対して、人物顕彰の意義や博物館への期待等を提案する。
- 2) 大学博物館は、実習生の作品や提案によって、若い世代が博物館に求めることを具体的に把握でき、彼らの感性や意見を展示などに応用できる。

本稿では、CST MUSEUM 館園実習における佐野利器顕彰を例に、あらたに考案した“対話型”自校教育プログラムの方法や意義を検討する。

2. “対話型” 自校教育プログラムの特徴及び実習概要

館園実習は、2010 年 10 月~12 月にかけて行った (10 月実習準備, 11 月~12 月実習)。一人当たりの実習時間は平均 20 時間 (2.9 日) であった。これは、館園実習 9 日間の約 1/3 に該当し、一コマあたり 90 分の授業では 13.3 回分に該当する。

機材や資料の数、指導密度の関係から、1 回の実習人数は 1~2 人におさえ、実習前には、実習生の動機付けとしての事前アンケートを行った。

Tab.1 Summary of the Practice Papers about Professor Toshikata Sano

所属	提出レポートの要旨
土木3年	専門のコンクリート工学の観点から佐野の顕彰意義を検討。船橋キャンパスに野外展示されているコンクリート資料や館内コンクリート関係系資料に焦点をあて、佐野の教えが現在の理工学部にも継承されていると考察。自分たちの原点である佐野について情報発信すべきと提案。
建築4年	自ら設計を行う「建築設計」で、①自分の力で挑戦する姿勢、②実践力、が身に付いたことを就職活動を通じて実感した体験を例に、建築学科には、実践に強い技術者を育てる佐野精神が継承されていると考察。佐野の業績や学部創設時の思いを未来へ継承すべきと提案。
建築4年	佐野が関わった同潤会アパートに着目。「佐野は芸術と科学の間に「計画」という概念を持ち込み、その整合を図ろうとしたのではないか」(大月敏雄, 2010)という解釈から、芸術と科学を結び付けるための「計画」について考察。佐野の作品やその実体験の場の提供を提案。
建築4年	館園実習初日に学習した「自校教育」というキーワードを軸に佐野の顕彰意義を検討。「理工学部創設者」「教育者」「建築学科との関係」という佐野の3つの側面について、高校生を対象にオープンキャンパスでの展示をすべきと提案。
建築4年	佐野の「私大経営では一つの施設でも多角的利用を工夫する」という指摘に着目。船橋キャンパス内に点在する建造物群に関するパンフレットを読み込み、佐野の経営方針は現在の理工学部にも引き継がれていると考察。新入生を対象とした展示や広報の充実を提案。
建築4年	「科学的建築学を背景とした、日本大学理工学部の創設者としての精神」に焦点をあて佐野の顕彰意義を検討。恩師である辰野金吾の助言など、佐野が建築に科学的思考を導入しようとした背景について展示で取り上げるべきと提案。
建築卒	「材鑑」に収められている50種の樹木の種類や特徴、木材としての用途、日本における木材産地分布図などをまとめた解説冊子を作成し、その体験に基づき佐野の顕彰意義を検討。佐野にかかわる資料収集、調査研究、普及を提案。

1: 日大理工・研究員, Research Institute of Science & Technology, Nihon University, Researcher 2: 日大理工・教員・交通, Dept. of Transportation Engineering & Socio-Technology, Specially-Appointed Professor 3: 日大理工・教員・建築, Dept. architecture, Professor

本プログラムの実施に際し、次の6つの博物館学的要件を考慮した。①実物資料（モノ資料の重視，人物が執筆・口述した「原文」の用意等），②好奇心の涵養，③対話型指導（実習生の専門性・個性・体験等の重視），④異分野コミュニケーション，⑤デジタル機材やソフトの活用，⑥学内連携（教材収集や専門指導等）。

### 3. 考察

提出レポートを分析すると、佐野利器顕彰の意義として、以下の6つの考察ができた。Tab.1 は要旨のみ。

#### ①実習生それぞれの専門分野からみた佐野利器像

本実習課題は、佐野の専門に近い土木・建築系の学生に課したが、それぞれが専門に応じた佐野利器像を述べており、多様な解釈を抽出することができた。

#### ②現在の学生にも薫陶を与える佐野利器の「言葉」

佐野が日本大学高等工学校（理工学部の礎，1920年開設）や工学部（理工学部の前身，1928年設置）の学生に訓示した「言葉」（「仁義」一仁とは「人の心」，義とは「人の道」，具体的にいえば「愛と勇」の大切さ<sup>[4]</sup>などを直接引用した実習生は4名（57%）。2名（29%）は、引用ではないが内容にふれた。佐野の「言葉」は50～90年を経ても、現在の理工学部生にも薫陶を与えることがわかった。

#### ③理工学部に息づく「佐野精神」の再発見

実習前のアンケートでは、実習生に理工学部における学生生活を佐野との関係から捉える視点はなかった。レポートでは、社会で実践的に活躍する卒業生、船橋キャンパス内の建造物<sup>[5][6]</sup>、自分で設計することを重視する「建築設計」（建築学科の実習）などに、「佐野精神」が脈々と受け継がれていることが指摘された。

佐野精神の現在への継承について、2名（29%）が「大学の授業」、1名（14%）が「就職活動体験」での実体験をあげて検討した。実習生が学部3、4年生や卒業生のため、学生生活での実体験から伝統を再考した指摘が抽出できたと考えられる。

#### ④学生が共感する展示コンセプトの抽出

7名全員が「展示」にふれていた。佐野が科学的建築学を志した動機（恩師辰野金吾の助言等）や、実習生自身が感銘を受けた佐野の訓示、佐野の作品やそれを体験できる場の提供など、若い学生にとって身近で共感できる内容が提案された。これらは学生の共感を呼ぶ展示コンセプトに応用できると考えられる。

#### ⑤二次資料の作成と採集

一名が、CST MUSEUM に展示されている「材鑑」（「明治四十三年四月／材鑑／佐野利器」と記されている）の解説冊子を作成した。実習生は、モノの解説資料作

成を通して実物学習ができ、完成された冊子は展示パネルや配布資料に応用できる。今後、実習生作成の二次資料と展示とを連動させることが考えられる。

#### ⑥日大生の誇りとしての佐野利器と戦略的情報発信

学外者に対しては実践に強い日大生の魅力がわかるよう、入学前の高校生に対しては、立地やネームバリューだけでなく、大学の歴史・教育スタンスを知り、自分にあった大学・学科を選択できる情報提供、新入生にも佐野の教育方針を情報発信するなど、対象者に応じて戦略的に考える必要性のあることが指摘された。展示にかかわる調査研究（2名）・資料収集（1名）・広報（1名）についても言及があった。今後、外部への戦略的な情報発信を検討することが考えられる。

### 4. まとめ

本研究で考案した“対話型”自校教育プログラムを通じて実習生は、創設者や自校への理解を深め、学生生活の中に伝統を再発見し、それを大学博物館への提案レポートや二次資料として具体化したとみなせる。

実習生の着眼点や提案・制作された解説冊子等は、展示のコンセプトづくり、展示パネルや解説資料への活用が期待できる。本教育プログラムは、“学生参加型展示”の一方法になると考えられる。

今後の課題としては、以下の3つがあげられる。

- 1) 佐野に関わる現地調査を実施し、現地の見所ワークシートの作成など現地調査方法を開発する。
- 2) CST MUSEUM に適宜設置される「学芸員課程の実習成果報告展」に出展するとともに、来館者の感想や評価等をフィードバックできるしくみを考える。
- 3) 23年度以降の館園実習生、学芸員課程1、2年次の履修生、学芸員課程以外、理工学部外の学生を対象にした教育プログラムを検討する。

謝辞 平成22年度日本大学理工学部科学技術史料センター（CST MUSEUM）館園実習では、小松修先生（日本大学広報部大学史編纂課）、宇崎崎勝也先生（日本大学理工学部建築学科准教授）、日本大学校門建築会に御教示いただきました。また館園実習生には、実習成果を論文として発表することについて快諾いただきました。厚く謝意を表します。本研究は、平成20～22年度科学研究費補助金（基盤研究C）「新しい時代の博物館像と理工系博物館学の学芸員教育の在り方—工学系の視点から」（研究代表者：伊東孝，課題番号：20605009）および平成20年度日本大学理工学部特別推進研究費によっておこなった。

註 [1]『佐野博士追想録』1957（CST MUSEUM「笠原敏郎文庫」史料） [2]『日本大学校門建築会創立80周年記念誌 佐野利器と日本大学高等工学校』2002 [3]小松修「日本大学工業学園と佐野利器の教育」『鬘誌』第5号、日本大学資料館設置準備室、2009 [4]「佐野先生を中心とした鼎談」『日本大学理工学部五十年史』p.71、1973『櫻工』創刊号、1995からの転載 [5]『大型構造物試験棟』2005 [6]『第4回特別展 日大理工のちから I 空間と構造の交差点』2007